



彩香

【体験版】

肛悦に酔う人妻の記憶。
路地裏で待ち受ける首輪の果てに

硝子蜂 著

蜜々文庫

† 読者の皆様へ

本作は「蜜々文庫」が贈る、
純粋な空想に基づくフィクションです。

作中の過激な描写はあくまで物語を彩るファンタジーであり、
現実中存在するあらゆる犯罪行為（暴行、脅迫等）を
容認・推奨するものではありません。

現実の世界では、互いの合意と尊厳を何よりも大切に。

——本能の解放は、
どうかこの物語の中だけでお楽しみください。

前書き

仕事を終え、家路にむかう薄暗い路地裏。人妻、神山彩香の前に現れたのは、過去に自分のすべてを支配していた「最悪の男」だった。

逆らえば、夫との平穏な日常が崩れさる。

愛する夫とスマホで会話をさせられながら、ストッキングを下ろされ、生尻を晒してアナルを舌で舐（なぶ）られる。彩香は必死に声を殺しながらも、男の責めに抗えず、はしたなく絶頂し――。

本作は、聡明な人妻が再び主人によって首輪を巻かれ、メス犬へと回帰していく物語である。約四万文字の密度で描かれる、心と肉体の甘美な崩壊。その狂おしい絶頂の結末を、どうぞ最後までご堪能ください。

——蜜々文庫

登場人物

† 神山 彩香（かみやま あやか）

外資系企業でチームを率いる有能な女性。夫との穏やかな日常を何より大切にする凛とした人妻だが、その胸の内には学生時代に「鎌口」へ依存し、調教された忌まわしい過去が封印されている。路地裏での再会を機に、彼女の潔癖な日常は、かつての屈辱的な快樂へと塗り潰されていく……

† 鎌口 徹（かまぐち とおる）

五十代の人当たりのいい男性。その仮面の下に、女を屈服させることに悦びを感じる、冷酷な加虐性を隠し持っている。かつて飼育した彩香と、熟れた今の彩香との食べ比べに愉悦し、肥大した巨根で、彼女の不浄の穴を溶かしていく……

目次

第一章 / 再会、あるいは幸福の終焉	6
第二章 前編 / 叛逆の残り火と、裏切りの肢体	20
後編 / 閃光に蘇る、羞恥の撮影記録	34
第三章 前編 / 開かれる禁忌と、夫への嘘	51
後編 / 侵食される不浄の門	66
第四章 前編 / 支配の首輪とメス犬の告白	76
後編 / 白濁に溺れる女の聖域	87
第五章 前編 / 陥落、あるいはメス奴隷の帰還	99
中編 / 淫靡に塗り替えられる愛の絆	109
後編 / 肛悦に酔う、堕ちた人妻	120

第一章

再会、あるいは幸福の終焉

どんよりとした夕方。

空気は湿り気を帯び、人通りの無い路地裏に吹き抜ける風が、排気ガスの匂いと、雨あがりのツンとしたアスファルトの匂いを運んでいる。

(早く帰らなきゃ。

健一さん、もうすぐ帰ってくる時間だわ.....)

神山彩香は少しだけ急ぎ足で、薄暗くなった裏通りの路地を歩いていた。会社から駅へ向かう帰り道。近道ではあるが人通りがなく、あまり通りたい道とは言えない。しかし、彼女は優しい夫との穏やかな夕飯を楽しみに、家路を急いだ。

結婚して3年。36歳になった彩香にとって、夫の健一との平穏な日常は何よりの宝物だった。昨夜も健一は、彼女

を本当に優しく、慈（いつく）しむように愛してくれた。彩香は、甘やかな時間を思い出して、頬を微かに火照らせる。

「彩香、愛しているよ」という囁きと共に、壊れ物を扱うように重ねられた口付け。柔らかな乳房をなぞる健一の指先が、熱を帯びた乳頭をゆっくりと、愛おしそうに捏ね上げる。

「んっ……あ、健一さん……っ、そこ、っ、んう……」

彼が彩香の濡れた割れ目に、固くなった肉棒を当てがい、彩香がそれをゆっくりと飲み込んでいく瞬間——。全身が熱く脈打ち、甘い痺れが腹の底からせり上がってくる。彩香は喉を鳴らしながら、その重みを全身で受け止める。

「ああ、っ、ああ、んっ……愛してる、健一さんっ！
……もっと、もっと深くっ、んんっ！」

耳元で愛おしそうに名前を呼ばれながら、夫の肉棒を締め付ける肉ひだの奥を、何度も、何度も突き上げられる。そのたびに彩香の蕾からは、グジュッグジュッと卑猥な水音が響き、肉の擦（こす）れる隙間から蜜が零れ落ちていく。

夫の愛の深さに胸を締め付けられ、溢れる愛液で内側から熱く潤う夜。……思い出すだけで、彩香の肌は夫の指先の感触を求めて熱く蕩けてしまう。

彩香が甘い記憶に浸りながら歩いていると、不意に背筋に氷を這わされたような、不気味な戦慄が走った。誰かに見られているような、ねっとりと皮膚にまとわりつく視線。

（……気のせい、よね？）

自分に言い聞かせ、足を早めながらバッグの持ち手を強く握り直す。けれど、その不安をあざ笑うかのように、建物の影の中から一人の人影が滑り出てきた。

「……っ！？」

気づいたときには、すべてが遅かった。

万力のような力で手首を掴み取られ、彩香の口から短い悲鳴が漏れる。反射的に振り払おうとしたが、男の太い腕はびくともしない。

「え！ なにっ……！？ はな、してっ……！」

必死に絞り出した声は、恐怖で掠れていた。相手は動じないどころか、ニヤついた顔をゆっくりと近づけてくる。街灯の鈍い光に照らされたその男、鎌口徹の顔を見た瞬間、彩香の全身の血が、足元から凍りついた。

「久しぶりだな、彩香。……ふふ、相変わらず、いい匂いだ。ずいぶん、いい女になったようだな？」

耳元に届いた、低くて粘り気のある、忌まわしい声。その響きを、彩香の身体は記憶していた。忘れたはずの、いや、必死に蓋をしてきた忌まわしい過去が、泥水のよ

うに溢れ出して視界を染めていく。

(やめて……！

思い出したくない、あんなこと……っ！)

脳裏に蘇るのは、大学二年生のあの夏。孤独な上京生活の空隙に、毒を流し込むように忍び寄ってきた男。

最初にあんなに紳士的だったのに。初めて招かれた彼の部屋で、すべてを奪われたあの日から、彼女の世界は「女」ではなく「メス」へと塗り替えられてしまった。

時に血が滲むほど容赦のない痛みに肉を抉（えぐ）られ、時にガラス細工を扱うような繊細な指先に愛でられる……

逃げられない「鞭」と、抗えないほど甘美な「飴」の反復は、彼女の未熟な心身を徹底的に作り替え、この男がいなければ呼吸さえできない体へと変え果てたのだ。

健一さんと出会い、ようやく清潔な光の下で幸せを掴んだはずなのに……

「あ……、あ……」

うまく呼吸ができない。肺の奥がひきつり、指先がガタガタと震えだすのを止めることができなかった。

「どうした、彩香？ 昔みたいに『ご主人様』、『徹様』って呼んでくれないのか？」

鎌口のザラついた指が首筋をなぞり、頬へとナメクジのように這い上がってくる。その生々しい感触が肌を滑るたび、彩香の白い肌には、激しい嫌悪感と、ゾワリとする鳥肌が波打っていった。

「っ……や、めて……手を、離して……。」

あなたとは、もう、関係ない、はず……よ……」

必死に絞り出した言葉も、男の嘲笑にかき消される。

「関係ない？ 冗談はやめろよ。お前は俺にメスとして一

生を誓っただろう？ たった10年程で忘れたのか？」

逃げ場を塞ぐように壁に押し付けられ、彩香の背中にコンクリートの冷たさが突き刺さる。

「昔愛し合った仲なのに、つめてえなあ。お前が俺の言うことを聞かなきゃ、誰かに八つ当たりしちまうかもなあ。たとえば、『神山健一』って奴とか？」

「え……っ！？」

（どうして、健一さんの名前をっ……！？

この男なら、本当に何をするか分からない……っ！）

突然夫の名前をだされ、彩香は激しく動揺する。大学生の頃、この男の暴力と懐柔を目の当たりにしてきた彼女の顔から、さらに血の気が引いていく。

「どうする？ 嫌なら大声で叫べばいい。ただ、俺はデリケートだからなあ……。ショックで誰かに、車で突っ込

んぢまうかもなあ？」

「……っ……！」

健一さんとの穏やかな生活のすべてが、この男の機嫌次第で砂の城のように崩れ去る。その恐怖に、彩香の視界がぐにやりと歪んだ。彼女の膝はガクガクと震え、声を出すことすらできなくなった。

「ふふふ、……よし、いい子だ……」

彩香の絶望を見透かしたような鎌口の歪んだ笑みが、至近距離まで迫る。むせ返るようなヤニと脂の匂いが鼻を突き、男の唇が強引に重なろうとした。

（……嫌っ！ 私の体は、健一さんのっ……！）

強引に唇を塞いだ、粘着質な感触に、全身の毛穴が逆立つような寒気を覚えた。彩香は両腕で男を押し返し、反射的に鎌口に噛みつこうと顎に力を込めた。

「痛てえじゃねえかつ、……生意気な口には、躰が必要だな……！」

直後、頬に鋭い衝撃が走った。

乾いた音が路地裏に響き、彩香の視界が火花を散らして歪む。男の掌による無慈悲な一撃。頬の熱い痛みは、彼女の微かな抵抗心を砕き、昔男にされた調教を思い出させた。

「……あ……っ」

叩かれた頬から恐怖が広がり、彼女の身体から力が抜けてしまう。

「抵抗すりゃするほど、お前の旦那がどうなるか、分かんねえぞ」

さらに鎌口の目に、嗜虐的な光が宿る。彩香は髪を力任せに掴まれ、グイッと のけ反らされると、首筋に鋭い痛

みが走った。男のもう片方の手が、夫の健一から「よく似合う」と褒められたばかりの、ブラウスの胸元に無造作にかかる。

「……っ、やめて……！ お願いっ……！」

ブチブチッ、という無残な音が夜の静寂を切り裂く。ボタンが弾け飛び、冷たい夜気が、露わになった彩香の白い肌に触れた。

「お願い？ お前、自分が今どんな立場で俺に口を利いてるか、分かってんのか？」

鎌口は彩香の髪を後ろから強く引き上げ、耳元で低く、粘りつくような声で囁いた。

「いいか。今ここで俺を満足させなきゃな、お前のその『綺麗な奥様』の仮面は、木っ端微塵だ。お前の旦那は、可哀想だなあ……妻のせいで、惨めにに病院送りかもなあ」

その言葉が、彼女の心臓を冷たく凍りつかせた。

「健一さんは、関係ないでしょ……っ

お願い、健一さんには酷いことしないでっ」

「だったら返事を聞かせろ。俺に従うか、すべてを失うか……どっちだ？」

彩香は唇を血が滲むほど強く噛み締めた。屈辱に視界が歪む。けれど、彼女の喉から漏れたのは、力のない敗北の言葉だった。

「……わかったわ。あなたの、言う通りにする……。

だから、健一さんだけは……」

「くくっ、最初からそう言えばいいんだよ。……じゃあ、まずはその綺麗な顔をこっちに向けろ」

強引に顎を掴み上げられ、彩香の視界が無理やり固定さ

れた。人通りのない路地裏、背中には冷たく硬いコンクリートの壁、そして正面からは鎌口の巨大な影が、自分を飲み込もうと迫っている。

(やだ……、来ないで……！)

鎌口の顔が、容赦なく間近まで近づいてくる。鼻腔を突く、生理的な嫌悪感を引き起こす獣のような雄の匂い。彩香は咄嗟に目を閉じ、それ以上の侵入を拒むように奥歯を強く食いしばった。

(やめて！ 唇だけは……唇は、

健一さんとの大切な、愛の繋がりなんだから……っ
こんなっ、……こんな、最低の男に！)

貝のように硬く閉ざされた彩香の唇を見ると、鎌口は薄汚い笑みを浮かべ、彼女の顎を掴んでいた手にギリギリと力を込めた。彩香の左右の頬肉へ男の親指と人差し指が深く食い込んでいく。万力で挟まれたかのように両頬を強く圧迫され、彼女の唇は金魚のように無様に尖らさ

れ、上下へと割り開かれてしまった。

「んぐう……っ！？」

もはや拒絶の手立てはない。

鎌口は下卑た笑みを深めると、彼女の唇の隙間に自らの赤黒い舌を突き出していった。

「ん、う……っ！」

抵抗も虚しく、熱く湿った肉塊が、震える小刻みな吐息を塞ぎながらヌルリと口内へ滑り込んでいく。

グチュ、じゅるり……と、下品な水音が暗闇に淫らに響いた。

彩香は、唇の裏へ強引に潜り込んできた鎌口の太い舌に、息を呑む。逃げようとする自身の舌を、まるで蛇のように巻きつき、容赦なく絡め取られていく。拒絶してどれだけ身をよじっても、汚らわしい男の舌は容赦なく迫り、ネットネットと互いの舌頭を擦（こす）り合わせて強

制的な愛撫を押しつけてきた。

さらに硬い歯の裏までねっとりと這い回られ、溢れ出る唾液をドロドロに掻き回される感覚に、彩香はただ翻弄されるしかなかった。

「……んぐっ！？……んんんーっ！」

（いや、嫌っ！……ああ……気持ち、悪い……
……わたしが、私の心が……汚される……っ）

胃の奥から込み上げる嫌悪を、彩香は両目を硬くつむり、震えながら耐えるしかなかった。

第二章 前編

叛逆の残り火と、裏切りの肢体

彩香の口内は、鎌口のおぞましい舌によって好き放題に掻き回されていた。

鎌口のザラついた舌の表面が、彩香の舌の付け根を掬い上げるように執拗に弄（いじ）るたび、彼女の唾液がグシュウッと溢れ出す。口腔の隅々までを、お互いの唾液がねっとりと混ざり合いながら蹂躪される感覚に、胃液が熱く込み上げてくる。

そんな彼女をあざ笑うように、喉の奥へ、楔（くさび）を打ち込むように太い舌が根元まで突き刺してきた。

「……っ！ げ、ほっ……！！」

我慢しきれずに激しい拒絶反応が彩香の身体を襲う。あまりの気持ち悪さに胃がせり上がり、酸っぱい胃液が喉を焼きながら迫り上がってくる。

鎌口はえずく彼女を逃がさなかった。両手で顔を万力のように押さえつけ、口を密着させたまま、自身の口内に溜まった下品な生唾を、ドロドロッと彩香の喉元へ流し込んできた。

「っ！ んぐ、うぶ……っ！？ う、ん ぐん ぐっ！！」

（いやっ！ 嫌、嫌っ！！ 汚い、やめてえっ！！）

男の体液を流し込まれるという悍（おぞ）ましい行為に、彩香は全身の毛穴を逆立たせ、狂ったように身をよじる。しかし、男の太い腕で身体と顎をガッチリと固定され、女の力ではなす術がない。

自身の唾液と男の唾液がドロドロに混ざり合い、泡立って喉の奥へと溜まっていく。

（うっ、うえっ……！ 気持ち、悪い……っ！！

ダメっ、いやあああ……っ！！）

彩香は涙で顔をぐしゃぐしゃに濡らし、喉の弁を必死に閉ざして抵抗した。だが、男の舌は喉の奥を容赦なくブスブスと突き蹂躪し続ける。

肺が引き裂かれそうなほどの限界が訪れ、彩香の意思を裏切って、喉がコクンッと勝手に動いてしまった。

「ん、ぐうっ……！ ふ、ううぐう……ッ！」

汚らしい男の生唾が、彼女の清らかな食道を滑り落ち、胃の中へと強制的に流し込まれていく。

まるで体内に直接、ドロドロとしたヘドロを直接注ぎ込まれたかのような、耐え難い拒絶感が彩香の全身を駆け巡った。

(いやっ！！ あの男のが……入ってくる……っ！

身体の中が、汚される……っ！！

気持ち悪い、うゝっ、うおゝえ……ッ！！)

蹂躪され続ける口腔内に広がる粘りつくような他人の感

触と、それを吞まされ、身体の深部から不潔に汚される
激しい嫌悪に、彩香は狂わんばかりに涙を流して悶え苦
しんだ。

(健一さん、ごめんなさい.....！

ごめんなさい.....こんな、汚い男の.....

わたし、お腹の中に.....っ！

うううっ.....嫌っ、助けて、健一さん.....っ！！)

心の中で最愛の夫の名を叫ぶが、それが叶うことはな
い。ようやく鎌口の唇が離れたとき、ドロッと2人の混じ
り合った唾液が、口元から流れ落ちた。

「.....っ！ げ、ほっ.....！！ うぐえっ.....っ」

鎌口の唇が離れた瞬間、彩香は壁に手をつき、激しくえ
ずいた。口の端から粘度の高い糸を引き、胃からせり上
がる酸っぱい熱に耐えながら、彼女は涙の溢れた瞳で地
面を睨みつける。

そんな彼女の頭上から、低く濁った声が降ってきた。

「.....くっくっく、どうだ？ 10年ぶりのキスの味は？ そんなに感激したか？」

鎌口は彩香の顎を乱暴に持ち上げると、胃液と唾液で濡れた彼女の唇を指でねっとりとなぞる。

「あんな優男と結婚して、すっかり『綺麗な奥様』になったつもりだったんだろうが.....お前の喉の奥まで汚せるのは、世界で俺だけだ。.....思い出してきただろ、この味を」

「うっ.....ふ、ふざけないで.....っ！」

口の中に残る男の全てを吐き出すように唾を吐き、彩香は必死に声を絞り出す。

彼女のそんな様子をおかしそうに眺めながら、鎌口が言葉が続ける。

「ふふふ、素直になれよ。それとも、昔みたいに力づくで犯されるのを期待してるのか？」

鎌口の濁った声が、耳元でねじれるように響く。
奪われたばかりの口内がヒリヒリと痛み、絶望の中で彩香は必死に唇を噛みしめた。

「……っ、ふ、ふざけないで！

あなたみたいなクズに……期待なんて……っ」

鋭く言い返したつもりだった。

しかし、まだ口内に残る、忘れたはずの記憶と同じ、男の舌の感触、唾液の味が、身体の奥へと毒のように広がっていく。

鎌口が腕を伸ばし、彩香の剥き出しにされた首筋からデコルテを、指先でねっとりと撫で回す。彼女の肌は不吉な鳥肌とわずかな疼きを含んで、泡立っていく。

（やめて……っ。健一さん、助けて……！）

心の中で最愛の夫の名を呼ぶが、それを握りつぶすかのように、鎌口の大きな掌がブラウスの上から豊かな乳房を驚掴みにした。

「あうっ！……っ、い……たい……っ！」

「ほら、言ってみろ。お前のその卑猥な体は、俺に乱暴にされるのを待ってたんだろ？」

鎌口がそう吐き捨てた直後、彩香のブラジャーのカップに太い指先が割り込み、容赦なく下方へと引きずり下ろされた。

弾けるように飛び出した、白く透き通った乳房が、湿った夜気に剥き出しにされる。彩香が「あっ」と声を上げる間もなく、鎌口の大きな掌がその片方を容赦なく驚掴みにし、肉がひしゃげるほど無造作に揉みしだいた。

「いや、いたっ！ 痛いっ、やめて……ッ！！」

「この程度で何言ってやがる。『奥様』ぶりやがって。ほら、この乳首を見てみろ。旦那の前でもこんなに赤黒く、下品に勃起させてるのか？」

鎌口の嘲るような声とともに、硬くなり、存在感を増していた彩香の乳頭が、男の親指と人差し指でギリギリと力任せに捻り上げられた。

「っあ.....痛っ！！」

脳を貫くような鋭い痛みに、彩香の背中がコンクリートの壁に激しく打ち付けられる。衝撃で肺の空気が押し出され、うまく呼吸ができない。

さらに、タイトスカートを強引に捲（まく）り上げられ、彼女のストッキングに包まれた股間が晒される。恥じる暇もなく、足の付け根や太ももの内側の柔らかい皮膚を、鎌口のねっとりとした掌で容赦なく撫でまわされた。

「い、嫌っ！……触らないでっ……や、めて……！」

先ほど胃液に焼かれた喉がヒリヒリと熱く爛（ただ）れ、ズキズキと脈打つ乳頭の激痛が、彩香の思考を引き裂いていく。暴力の波に絶え間なく襲われ、彼女の華奢な肉体から、男に抗うための気力がガリガリと削ぎ落とされていった。必死に絞り出す拒絶の言葉は、もはや形をなさず、掠れた吐息となって虚しく消える。

「口ではそう言いながら、ここはどうなんだ？ え？」

（っ、そこはっ！……いやっ！）

彩香の必死の抵抗も虚しく、鎌口の指先はストッキング越しに彼女の足の間、最も卑猥な膨らみへと深く沈み込んだ。じっとりと熱を帯び、男の蹂躪を待ちわびていたかのような、むっちりとした肉の弾力。

鎌口が指全体でその秘裂の溝をなぞり、奥までグイッと抉（えぐ）るように押し上げる。ミチッ、という繊維の軋みとともに、圧迫された肉丘の隙間から、蓄えられて

いた熱い愛液が、こらえきれずに惨めに吹き出した。

ぶじゅっ……ぐじゅるりっ……

自身の股間から立ち上る濃厚な牝の匂いが暗闇に広がり、彩香は屈辱と恥ずかしさで全身を激しく震わせる。

「なんだ、随分喜んでるじゃないかっ。くくく、お前の身体は、俺のことを随分歓迎してくれているぞ！ あははははは。」

男の手が繰り返し、ぼってりとした秘部のを肉たぶを圧迫する。そのたびに「ぐちゅっ」と、自身の内側から滲む蜜が、押し出されるように男の指の隙間から漏れ出てくる。

「っ、あ、あああっ……

や、やめてっ、ん、んんっ……！」

力任せに揉みしだかれるたび、強烈な「雄」の圧力が脊髄を突き抜けていった。

鎌口の指圧が、沙織の最も敏感な箇所を的確に、かつ暴力的に抉（えぐ）り上げる。その圧力に、ストッキングの中の肉丘が、男の掌の中でぐじゅぐじゅとひしゃげ、形を変えていく。

「ひぎいっ……！？ いやっ！ あ、あああっ……！」

男への激しい嫌悪の裏で、脳を直接灼くような刺激。彩香は天を仰ぎ、声を殺してのけぞった。夫との愛では決して得られ……

——体験版はここまでとなります。

倒錯した快樂の底へと沈んでいく彩香の運命は、製品版
でお楽しみいただけます。

蜜々文庫

奥付

作品名 彩香 【体験版】

/ 肛悦に酔う人妻の記憶。路地裏で待ち受ける首輪の果てに

著 者 硝子蜂

発 行 蜜々文庫

ビジュアル

生成AIによる生成画像を加工・編集

制作注記

本作のテキストは著者による創作であり、AIによる自動生成をベースにした独自の編集・加筆を行っています。

© 2026 硝子蜂 / 蜜々文庫

